

文京区教育委員会主催
「四大学学長による講演会」

平成10年1月10日（土）

スタンダールを読みながら

白田 紘

この講演会においては、これまで筆者が親しんできたフランス19世紀の作家スタンタールの魅力を、体験的に語った。高校時代に『赤と黒』を翻訳で読み、日本の近代小説とは違った重厚さ、とりわけ登場人物の心理的な追求と分析に圧倒され、大学で仏文学を専攻するきっかけとなったが、のちに原文でさらに細かく読み進めながら探求していくと、作品の隅々まで、舞台となった王政復古の時代（1814—30）が浸透していることが分かり、作品の奥深さを理解し、感動がさらに深まった。と同時に、その前作の『アルマンズ』がこの作品と表裏の関係にあることが浮かびあがってきた。そこからスタンタールの当代の政治や社会に対する見方や姿勢を、かれの書いた創作以外の著述のなかに追求した。スタンダールはナポレオンとともに没落するとミラノに「亡命」するが、そこでのイタリア体験と、パリに戻ってからのジャーナリズムの寄稿家としての活動が、かれの教養を豊かにし、物事を正確に、深く見る訓練をさせたと言える。スタンダールの小説はそうした作家の教養の集積であることを明らかにした。